

# 望郷篇

## 映画文学人生論

- 001) 青べか物語 山本周五郎 監督：川島雄三画  
002) 男はつらいよ 監督・脚本 山田洋次  
003) 雪国 川端康成 監督：豊田四郎 大庭秀雄  
004) 八つ墓村 横溝正史 監督：野村芳太郎 市川崑  
005) 戦争と人間 五味川純平 監督：山本薩夫  
参考：おくの細道 松尾芭蕉

予もいづれの年よりか、片雲の風にさそはれて、漂泊の思ひやまず

山本周五郎の小説『青べか物語』を読んで、主人公の蒸気河岸の先生とともに「人はなんによつて生くるか」を考えた。続いて山田洋次監督の映画『男はつらいよ』を観て、「望郷の念やみがたく」と、「漂泊の思ひやまず」とがまじりあったやや複雑な気分にと誘われた。

「望郷の念やみがたく」は寅さん、「漂泊の思ひやまず」は俳人芭蕉の言葉である。寅さんも芭蕉も「人はなんによつて生くるか」は考えない。「そんなことは深く考えないほうがいいですよ」と寅さんは言い、「無能無芸にして只此一筋に繋（つな）がる」と芭蕉は言うだけだろう。

しかし、芭蕉の旅と寅さんの旅には「人はなんによつて生くるか」という問いへの答えのヒントがころがっているような気がする。私も旅に出かけて確かめたいが、事情がそれを許さない。

その代わりに、『男はつらいよ』シリーズ四十本本の映画をDVDで観た。他にも望郷や漂泊の映画を鑑賞し、それらの原作を読んだ。

山本周五郎	青べか物語	川島雄三
山田洋次	男はつらいよ	山田洋次
川端康成	雪国	大庭秀雄
横溝正史	八つ墓村	市川崑
五味川純平	戦争と人間	山本薩夫



## 望郷篇

映画文学人生論

こうしてタイトルを並べてみると、まとまりのない選択のような印象を与えるかもしれないが、私個人にはいずれも地縁があり。意識の内部や脳のシナプス（神経細胞）はつながっている。映画も文学も受け手の反応は個人的なものだ。

『男はつらいよ』第五話「望郷篇」で寅さんは江戸川下流の青べか村にやってきた。豆腐屋の娘と所帯をもって落ち着くかにみえたが、結局はふられて、またしても、風の吹くまま、気の向くまま、行方定めぬ旅に出る。

そのうち、第八話「寅次郎恋唄」と第三十二話「口笛を吹く寅次郎」では備中高梁にふらりとあらわれた。

私は現在、青べか村に住んでいるが、ここはふるさとではない。子供のころは備中高梁から伯備線で山陰寄りの雪国「八つ墓村」にいた。その村にも寅さんが名探偵金田一耕助に変装してやってきたことがある。

実家の先祖は、尼子の落人と言いつた伝えられている。本籍は八つ墓村、現住所は青べか村——ただし、私が生まれたのは『戦争と人間』の舞台にもなった満州のハルピンだ。万里の長城に近い張家口で暮らしていたこともある。いったいどこがほんとうのふるさとなのだろう。

とりあえずは、映画と原作を参考に、「人はなんによって生きるか」を考えるしかない。

杖ついて翁佇む冬の旅